

ボランテイア精神の源を訪ねて
大日本帝国水難救済会の開会式

明治22年に大日本帝国水難救済会として創立してから今年で120周年を迎えるにあたり、この記念すべき契機に日本における水難救済の歴史を様々な角度から検証してまいります。

◆はじめに◆

明治期に金刀比羅宮に仕えた松岡調(まつおか・みつぎ)が記した『年々日記 明治二十二年 百四』の十一月三日の条に、大日本帝国水難救済会の開会式次第が貼付されています。

本会開会式は明治22年(1889)11月3日、明治天皇の皇子明宮嘉仁(はるのみや・よしひと)親王(後の大正天皇)が皇太子に冊立(さくりつ)【※筆者注…皇太子に正式に定められること】された佳日を期して挙行されました。

◆式次第◆

式次第によると、開会式は以下のように進行了。

- ①開会奏上祭
- ②開会式
- ③遭難船救助訓練

まず①奏上祭は、「海の護り神」と篤く崇敬される金刀比羅大神さまに開会式挙行の旨をご報告するお祭りです。午前8時より金刀比羅宮御本宮で齋行され、本会開会式に先立ち予め会長に推されていた琴陵宥常宮司が齋主となり、官公庁関係者、本会正(会)員、多度津・與(与)島の見張員、水夫などの多数の方が参列されました。

祝詞奏上後に「次旗号授与式ヲ行フ」とありますが、これは御神体に近い御本宮中殿(幣殿)にお供えされていた旗号(会旗)を見張人と組合長の方々にお渡しする儀式です。

次に、②開会式は奏上祭終了後、関係者一同が表書院七賢の間・虎の間・鶴の間・富士の間などを開放して特設された式場に移動して挙行されました。

式典ではまず、琴陵宥常会長が鍋島直大(なおひろ)副総裁の祝詞を代読し、次に林薫(ただす)香川県知事の祝辞を吉田豊文書記官が代読。金刀比羅宮禰宜で本会会員の松岡調が会員を代表して答辞を述べました。鍋島副総裁の祝詞は本会発足に至るまでの経緯が述べられ、主唱者琴陵宥常宮司の敬神愛国の誠意、賛同者(会員)の慈善精神を称え、本会発足を祝う内容でした。

猶、開会式は副総裁祝詞、来賓祝辞、会員代表答辞のみという極めて簡素な式典であり、式典終了後、式場を祝宴会場に模様替えしての祝宴となりました。

『年々日記 百四』には「(祝宴会場内) すき間も無く肩と肩とをすり合せて飲食するさまおとろおとろしく、此社務所にしても未曾有の事なん、折詰をくり出す所に、酒のかん【※筆者



七賢の間

注…爛】する場などを折々のそき見に、とよめき渡れるハさる事なり」とあり、その慌しさは前代未聞であったことが分かります。当日は500人強に及ぶ大勢の方々が来場されました。

最後に③遭難船救助訓練については、式典並びに祝宴が一段落した午後2時過ぎ、一同は同年5月23日に開通した讃岐鉄道の列車に乗って多度津に設置された救難所に向かい、初の遭難船救助訓練を実施致しました。次第には

「次一同多度津ニ出向ス」とあります。

救助訓練の様子は『年々日記 百四』に「十丁ハかり沖に百石積ほどの船一艘見ゆるが、大浪に打れたるさまなるが、紅藍黄などにしてるしかきたる所謂信号をあけて救助を乞へるに、見張等よりも旗をあけて是に應じたと見るや、号角を吹きならして水夫をと、のへ、即て端舟(たんしゅう)【筆者注…はしけ】五艘ハかりに六七人の水夫の乗りて漕(こ)きいたせり、其早き

事矢を射るか如し、直に遭難船にこきよせて積たる荷物、俵やうの物をつみかへて陸地へ運ハんとする、此時あとより新調の救助船二艘こき来りて、遭難人の帆柱にのほり居るを助けのせ、又既に溺死(できし)せんと海上にた、よへる者にハ、浮輪をあたへやりて引きあげ、直にけつとうにて躰をつみなどして、陸地へ向けて漕き行きたり」とあり、本会初の救助訓練はさながら本物の遭難船を相手にしているかのような緊迫感がありました。

◆おわりに◆

本稿では日本水難救済会の前身、大日本帝国水難救済会の開会式を紹介させて頂きました。在りし日の水難救済会に思いを馳せていただければ幸いです。

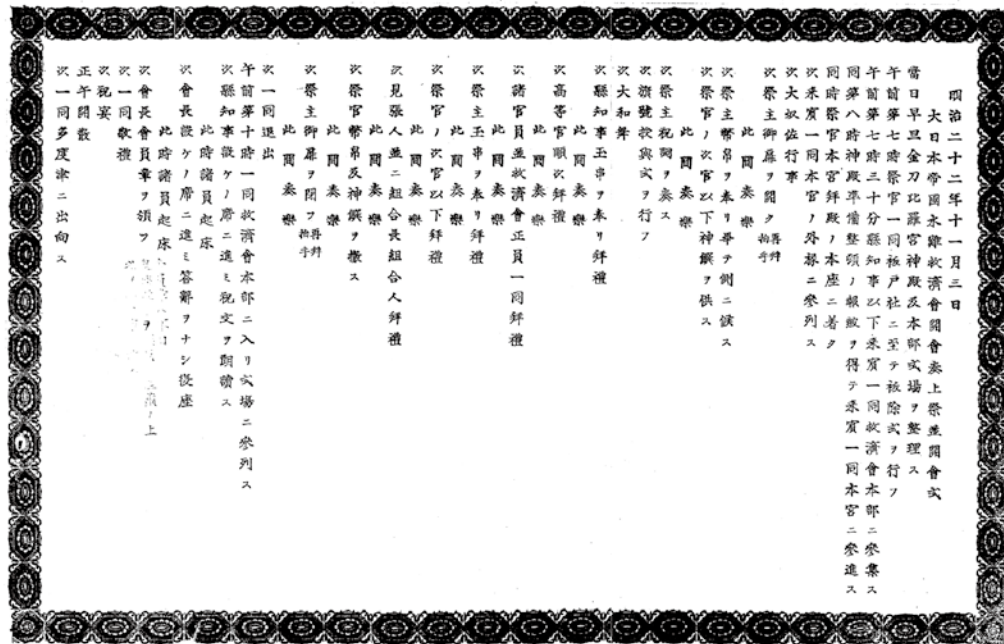
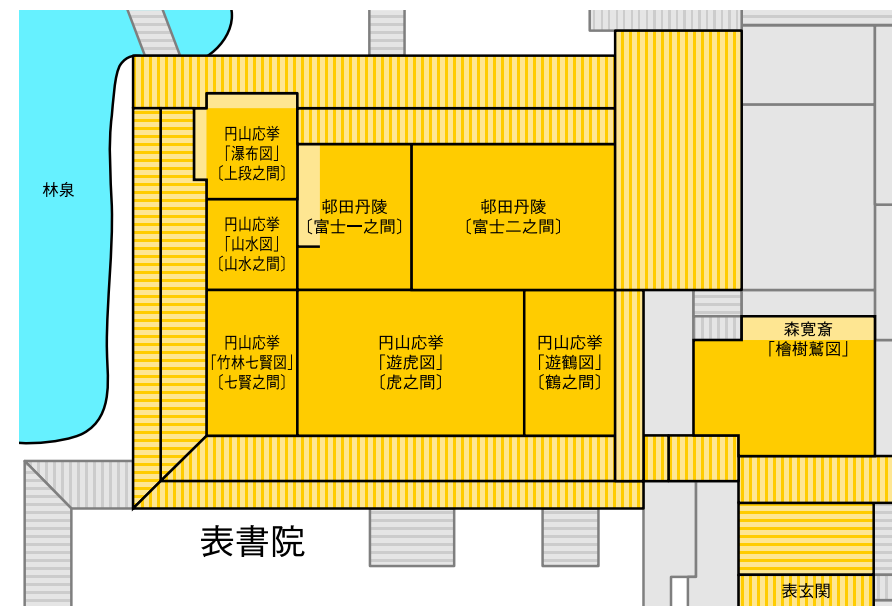
皆様の今後益々のご活躍、ご健勝をお祈り申し上げ御筆致します。

◆執筆者◆



金刀比羅宮教学顧問
西牟田 崇生氏

■式場・会場参考図



大日本帝国水難救済会開会奏上祭並開会式(次第)